

# 大阪泉南地方における伝統的民家の変遷に関する研究



K99031 梶川 幸恵  
K99069 角田 勇一

## I はじめに

### I-1 研究の目的

大阪泉南地方には昔ながらの大規模な古民家が多く現存する。民家は生活に大変密接するものであり、生活状況や時代により変化し続けるものである。本研究では泉南地方の特に東部における文化的にも建築的にも貴重な伝統的住居を年代別に選り、実測調査、及び増改築の痕跡を基に建設当初の民家を復原するとともに、同地方の重要文化財である中家・先行研究と合わせ、江戸初期～昭和初期における民家の平面形式・小屋組架構の変遷を明らかにすることを目的とする。

### I-2 研究の方法

- ① 岸和田市積川町1軒、泉南郡熊取町2軒のそれぞれ建設年代の異なる民家にご協力頂き、実測調査を実施した。各々の建設年代は表1に示す。
- ② 3棟の現状図面を構造図や材痕跡、聞き取りによる増改築の経緯を基に復原を行う。
- ③ それぞれの民家に関する平面形式・小屋組架構の変遷を時系列に沿って把握する。
- ④ 重要文化財の中家、昨年度調査した岸和田市稲葉町2軒、泉南郡熊取町2軒、今年度調査した3軒の合計8軒を合わせ、その時代の民家がどのような平面形式・小屋組架構であったかを分析して系統づけ、現在に至るまでの形成過程を明らかにする。

表1 調査対象家屋一覧表

	田宮家	七里家	信貴家
建設年代	昭和初期 1930年頃	明治元年 1868年	江戸後期 1800年前後
建設年代根拠	間取り	間取り	襖絵墨書
図面	1階平面図	○	○
	梁行断面図	○	○
	配置図	○	○
	架構図	○	○
	痕跡図	○	○

### I-3 岸和田市の歴史

岸和田市の歴史は古く、弥生時代・古墳時代の古墳や遺跡が数多くが発見されている。古くから栄えてきたこの街は府の南部、泉州の中心部に位置し、江戸時代は岡部藩の城下町として栄え、明治末より紡績業を中心に商工業が発展した。良質の水に恵まれていたため、紡績業と共に酒造業も盛んに行われた。

### I-4 泉南郡熊取町の歴史

熊取町も岸和田市同様歴史が古く、縄文時代まで遡ることができる。古墳もいくつか残っており、太古からこの地域が人々の営みの場所として使用されていたことが分かる。江戸時代には綿栽培を始め、紡績業が発展した。この地域には中家、降井家という中世からの豪農がおり、大久保・小垣内・小谷・五門・野田・紺屋・七山・久保の8ヶ所の字に分かれる、塊村及び街村集落である。



図1 調査対象地域



図2 岸和田市地図



図3 熊取町地図

## II 調査対象家屋について

### II-1 田宮家

田宮家は、明治時代より家業として酒造業を行っていたが、戦後に織物業に転じ、タオル製造を開始した。現在はやめてしまったが、工場は物置として現存している。岸和田藩主のお茶屋敷として建てられた、「浜御殿」の書院が廃藩置県により払い下げられ、田宮家主屋の座敷に明治2年に移築されている。主屋の建設年代は、昭和初期であり、その時に浜御殿の旧材を再び利用している。間取りは、浜御殿移築部と4室を基本に北側を増築し、桁行×梁間は、約9間×6間である。小屋組は、土間上は和小屋で、居室上は登り梁とする。屋根は、本瓦葺むくり屋根で、入母屋造とし、四周に下屋が巡っている。軸組は角柱に差物、鴨居と長押で固め、差物は、土間境で二重となっている。最大の特徴は、基礎に布石を用いる点で、昨年と合わせ計8軒の実測対象中、唯一の事例である。

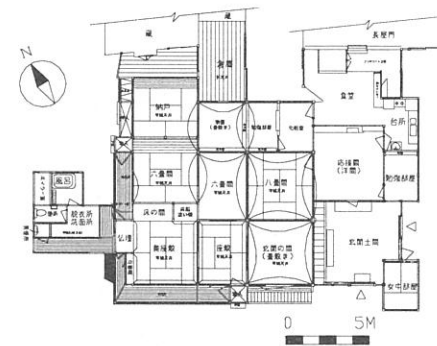


図4 田宮家 平面図



写真1 外観



図5 田宮家 断面図



写真2 土間上部の小屋組

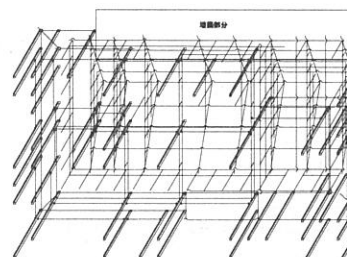


図6 田宮家 架構図

### II-2 七里家

七里家は熊取屈指の旧家であり、家業は綿布を製造していた。戦後に工場をやめたが、綿布綿糸の売買はその後も続けて経営していた。主屋の建設年代は、江戸末期に着工、明治元年に完成と伝えられている。間取りは6室を基本に、主屋の奥を2室、明治30年頃増築した。桁行×梁間は、約12間×6間である。小屋組は、玄関土間上部は和小屋で、居室上部と増築部座敷上は登り梁を用いる。屋根は本瓦葺、入母屋屋根である。軸組は、角柱に差物、鴨居と長押により固める。最大の特徴は、妻側に主要入口を設けて妻入りとすること、大黒柱が棟木の真下に置かれていることである。



写真3 主屋外観



写真4 小屋組

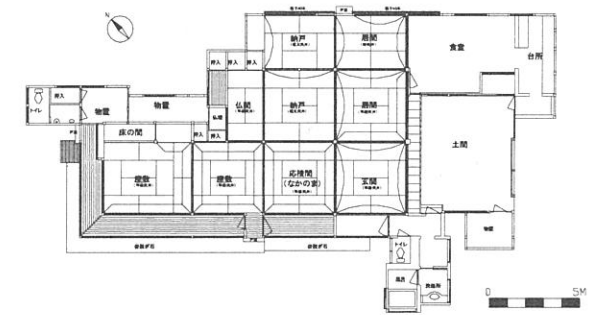


図7 七里家 平面図

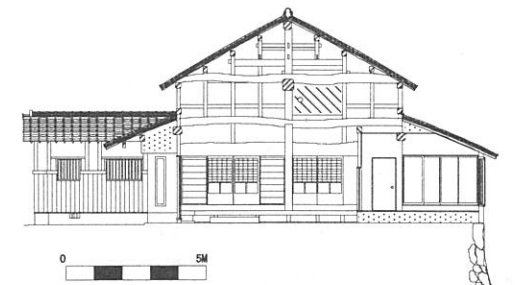


図8 七里家 断面図

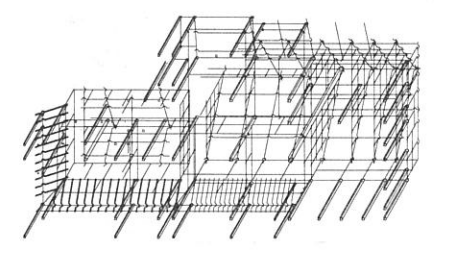


図9 七里家 架構図

### II-3 信貴家

信貴家の家業は、庄屋職であり酒造業を行っていた。平成11年に廃業してしまったが、主屋の敷地の隣には、清酒醸造のための工場や保管用の酒蔵、事務所もある。主屋の建設年代は、座敷襖絵墨書の年代により、江戸後期、1800年前後と推定される。間取りは、4間取りを基本に、下屋とその他の部屋を増築した。また主屋には、式台付きの玄関が、渡り廊下によって接続されている。桁行×梁間は、約8間×6間半である。小屋組は、扱首組で、一部に真束（おだち）が補われており、屋根は茅葺で、下屋を葺瓦葺とする。上段の間の柱はべんから塗りとなっている。最大の特徴は、座敷列を設けるため、北側に大きく延ばした瓦葺下屋のあることで、そのために茅葺屋根は少し非対称形となっている。現在、ご家族は離れで暮らしているため、主屋は使用されていないが特に大きな傷みは無かった。

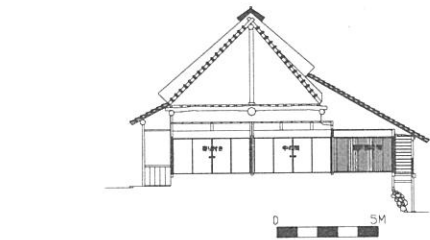
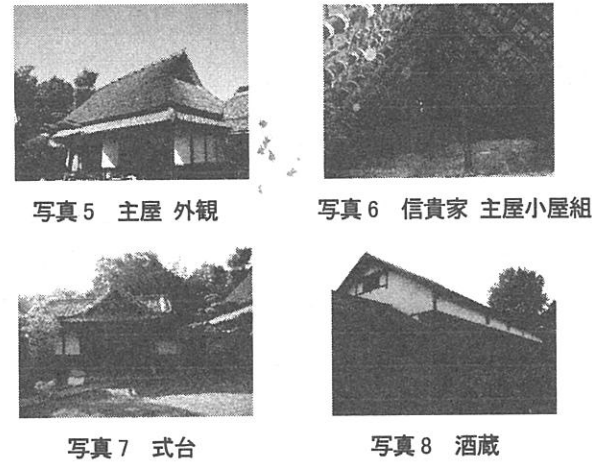


図11 信貴家主屋 断面図

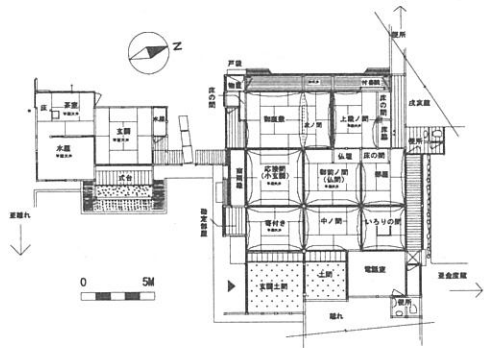


図10 信貴家 平面図

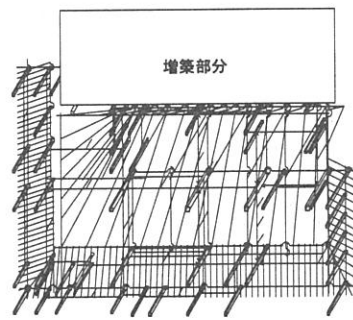


図12 信貴家主屋 架構図

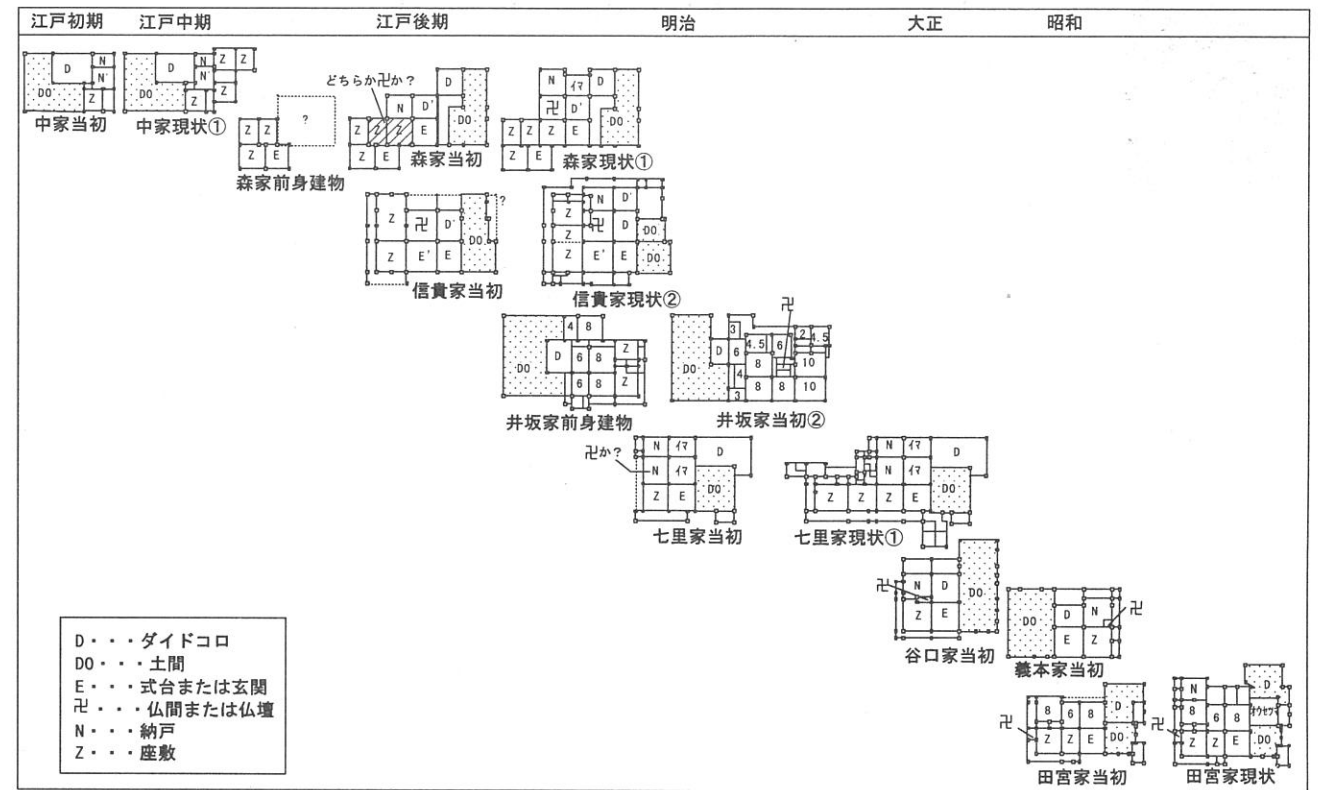
### III 民家平面・架構の変遷について

調査した3軒に、昨年度調査を行った4軒と中家を加えた計8軒の、平面・架構・屋根形状を含めた編年表を作成し、表2に示す。また、調査した3軒の平面復原図に先行研究の復原図、前身建物図などを加えて表3に、先行研究と小屋組架構の特徴を比較検討し、江戸初期～昭和初期の泉南地方における小屋組架構の変遷を表4にまとめる。

表2 民家編年表

名称	中家	森家	信貴家	七里家	井坂家	谷口家	田宮家	義本家
建設年代	江戸初期	寛政12年 1800年	江戸後期 1800年前後	明治元年 1868年	明治初期 1870年頃	大正11年 1922年	昭和初期 1930年頃	昭和初期 1932年頃
桁行×梁行(間)	10×9	8×6	8×6.5	12×6	13×7	7×6	9×5	7.5×5
上屋梁(間)	4	3.5	3.5	4	5	4	3.5	3.5
小屋組	東立扱首	和小屋 (増築部) 東立扱首 (主屋)	扱首組 (一部に真束)	和小屋 (土間上部) 登り梁 (居室上部)	和小屋 (落ち屋根) 登り梁 (居室上部)	和小屋 (土間上部) 登り梁 (居室上部)	和小屋 (土間上部) 登り梁 (居室上部)	和小屋 (土間上部) 登り梁 (居室上部)
屋根	茅葺	葦葺	茅葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺	瓦葺
綴	有	有	有	無	有	無	無	無
ぐく口の位置	土間に突出	土間に突出	非突出	非突出	土間に突出	非突出	非突出	非突出
基本平面類型	喰違三間取り (前座敷型)	整形四間取り	整形四間取り	整形六間取り	大規模複合型	整形四間取り	整形四間取り	整形四間取り

表3 各戸の平面の変遷

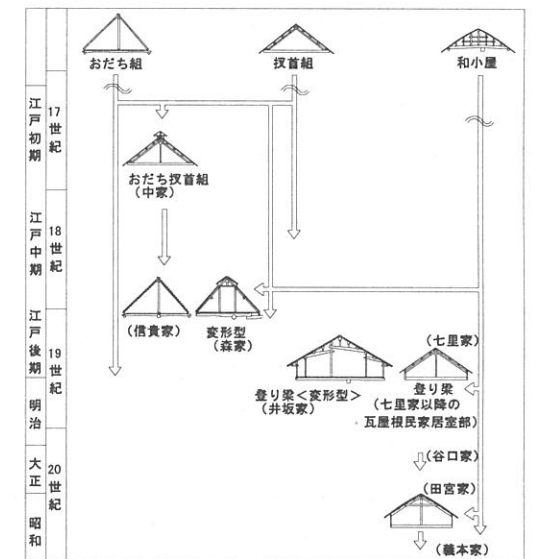


### IV 結論

中家に示されるように住宅規模の増大を座敷列の付設で図り、それとともに仏間が独立して設けられるようになったと考えられる。江戸後期の森家・信貴家以降になると、建設当初から仏間があったと復原される。逆に大正期以降は再び座敷に仏壇を併置するようになる。また、座敷の付設は、中家・森家・七里家の別棟として設けられる①パターンと、信貴家・井坂家のように梁間奥へ設けられる②パターンの2パターンに分ける事ができる。田宮家は、浜御殿からの移築のため、建設当初からザシキと仏間が兼用であった。

小屋組架構の変遷をみると、「扱首組」と「おだち組」を併用した架構形式の、茅(葦)葺き屋根が、江戸期の民家に多く使われていた。それが明治期に入ると、「和小屋+登り梁」の瓦屋根が多くなる。併用型の「おだち扱首組」から「和小屋+登り梁」へ移行する、過渡期の架構形態に近いのが井坂家であると思われる。井坂家は登り梁の初期の形と見ることができ、登り梁は小屋裏空間を有効利用するために設けられた物と考えられる。井坂家以降の時代の民家は、居室上部は登り梁、土間上部は和小屋という架構形式が多く、これが近代の瓦屋根に対応し、定型化していったと言える。

表4 小屋組架構変遷表



- <参考文献>・「熊取町史本文編」熊取町史編さん委員会 2000年
- ・「日本の民家調査報告書集 第12巻」東洋書林 1997年
  - ・「岸和田市史 第三巻」岸和田市史編さん委員会 2000年
  - ・「大阪府行政百年史 泉南版」行政人事調査会 1978年
  - ・「減びゆく民家」川島宙次 著 主婦と生活社 1973年
  - ・「大阪泉南地方の伝統的民家の変遷に関する研究」堀口智子 2001年
  - ・「重要文化財中家住宅修理工事報告書」重要文化財中家住宅修理委員会 1968年

指導教員名 伊藤 洋子教授